

## 忘却か復讐か

浅田雅明

‘Princess,’ he said eventually. ‘I’d like you then to promise me something.’

‘What is it you ask, Axl?’

‘Should Querig really die and the mist begin to clear. Should memories return, and among them of times I disappointed you. Promise, princess, you’ll not forget what you feel in your heart for me at this moment.’<sup>1</sup>

「お姫様」彼は意を決したように言った。約束して欲しいことがあるんだ。」

「それは何かしら、アクセル」

「クリエグが死んで霧が晴れ、記憶が戻ったとする。そのなかにはおまえをがっかりさせるものがあるかもしれない。約束しておくれ、お姫様、今この瞬間におまえの心にある私への思いを忘れないことを。」<sup>2</sup>

息子が住む村に向かう旅に出かけたアクセル(Axl)とベアトリス(Beatrice)の老夫婦は、途中出会った少女に懇願され、雌竜クエリグ(Guerig)に毒の餌を食べた子羊を与えるために、険しい山道を登りクリエグの巣穴近くの巨人のケルンまで辿り着く。クリエグが倒されることにより、忘れていた過去の記憶が戻ってくることに不安を感じるアクセルは、失望させるようなことを思い出そうとも、いまふたりが互いを信じあっている気持ちを忘れないで欲しいとベアトリスに懇願する。「この瞬間、おまえの心にあるわたしを、そのまま心にとどめておいてくれるかい。霧が晴れたとき、そこに何が見えようとも。(Promise to keep what you feel for me this moment always in your heart, no matter what you see once the mist’s gone. p.280)」

我々が考える時の観念は概ね時計や暦に基づいていて、一秒一秒一日一日と、刻一刻過ぎゆく時のなかで生きている。そして「いま」は留まることはなく、常に「未来」が「今」となり、そして「今」が「過去」となり絶え間なく流れていく。この瞬間にも未来が今になり、そして過去になっているのだ。そう考えると未来は今であり過去でもあると言えよう。すなわち、この「いま」という瞬間には、いわば未来と現在と過去が一体となって存在しているとも考えられる。今この時に目を閉じるところのなかに過去の映像を蘇らせることができるが、その時「過去」はまさに「いま」となってそこにある。しかし過去の記憶は徐々に薄れていき思い出すこともできなくなるものが多いのも事実である。それは忘れられてしまって既に存在していないのか、或は忘却という霧の中に深く埋もれてしまっているだけなのか。或は無意識のうちに痛ましい記憶を埋もれさせ、逆に好ましい記憶だけは記憶の表層で増幅させているのであろうか。もしも我々の善悪すべての記憶をまるで魔法のような何らかの方法で霧の奥に閉じ込めた時、やがて時が来てその霧が晴れ視界が明瞭になった時には良い思い出だけでなく、悪い思い出も蘇ってくる。それはもしかしたら忘れていたことで保たれていた平穩の維持が困難になり、人々の人間関係を壊すことになるかもしれないのだ。

*The Buried Giant* 『忘れられた巨人』はカズオ・イシグロ (Kazuo Ishiguro) が2015年に発表した長篇第7作であるが、前作の *Nocturnes: Five Stories of Music and Nightfall* 『夜想曲集 音楽と夕暮れをめぐる五つの物語』(2009年)の発表があるものの、長篇としては2005年の第6作 *Never Let Me Go* 『わたしを離さないで』以来、実に10年ぶりの待望作であった<sup>3</sup>。イシグロの今回の作品のなかではサクソン族とブリトン族がかりうじて平和を保っているところから、おおよそ450年にも及ぶ支配から410年にローマが撤退したあとからサクソン族がブリトン人を放逐するまでの時代と推定される。伝説の武人アーサー王はローマ撤退後に侵略してきたサクソン族を撃滅したということであるが、アーサー王のモデルとなる勇猛果敢なブリトン王や武将の記録については曖昧なものが多く特定できないというのが事実である<sup>4</sup>。*Historia Brittonum*<sup>5</sup> 『ブリトン人の歴史』によればアーサーが他の

ブリトン人の王たちとともにサクソン人に対して12回にわたる戦いを行い、最後にパドニクス山の戦いでアーサーが一日で900人以上の西進してきた敵サクソン人を倒すという大勝利を挙げたとの記述がある。のちの *Annales Cambriae*<sup>6</sup>『カンブリア年代記』によればこの戦いが行われたのは518年、そしてアーサーが討ち死にしたカムランの戦いが539年ということである。作品中ではブリトン人はキリスト教であるが、サクソン人たちはまだ自然崇拝の多神教である。歴史的事実としては、597年にはローマ教皇グレゴリウス1世がベネディクト派修道士アウグスティヌスを派遣、アングロ・サクソン七王国のひとつ、ケント王国のエゼルベルト王（616頃没）の改宗に成功し、ノーサンブリアのディラ王国エドウィンが627年にキリスト教に改宗したという記録が残っていることから、この作品の時代はアングロ・サクソンがキリスト教に改宗する前で、ケルト民族（ブリトン族）征服前夜の6世紀頃と推定される。

歴史的事実を決定的に証明する確固たる記録がないので、いかようにも空想の楽しみを享受できる時代を背景にして、作品には伝説の王アーサーの甥である有名な騎士ガウェイン (Gawain) 卿、サクソン人の勇猛な戦士ウイスタン (Wistan)、マーリン (Merlin) の黒魔術により眠らされている雌竜クエリグ、そして妖精や鬼も随所に現れ、これまでのイシグロ作品とは全く異なったファンタジー的世界が展開されている。「埋められた (buried) 巨人」とは何者なのか。その巨人が再び動き出したとき人々はどのような禍に巻き込まれてしまうのか。読者はまるでマーリンのごときイシグロの語りの魔術に引き込まれていくのである。

物語はアクセルとベアトリスの老夫婦が息子の住む村へと旅をする僅か三日間の出来事である。不思議なことに村人たちには記憶がなくなっていて、ふたりは息子がどこに住んでいるのか思い出すことができず、自分たちの過去についての記憶もなくなっている。旅に出たふたりは断片的ではあるが少しずつ記憶を取り戻していくことになるのだが、記憶が戻るたびに感じる不安感の正体は何であるのか。出会う人々、戦士ウイスタン、アーサー王の騎士ガウェイン、少年エドウィン (Edwin) は誰が敵で、誰が味方なのか。アク

セルとベアトリスに戻ってきた記憶はふたりの関係をどのように変えていくのか。忘れた記憶は忘れたままのほうが幸せなのか、あるいは記憶を取り戻してすべての事実と向き合うことが本当の幸せに近づくことになるのであろうか<sup>7</sup>。この作品がこれまでの作品と大きく異なるのは作品背景の時代設定と、エドウィン、ガウェイン、船頭などの異なる語り手を導入し、一人称の「信頼できない語り手」を用いていないことである。これまでイシグロは一貫して記憶を巡る旅というテーマを扱ってきたが、この作品は舞台設定、語りと、今までとは全く異なる新たな挑戦をしている。それでも「旅」で明らかになる「記憶」が人々の間にもたらす功罪についてのイシグロの関心は、ファンタジーの衣をまとったこの作品においても変わってはいない。拙論では記憶を取り戻す過程で明らかにされる個人の間の愛情と葛藤、そして民族間の憎悪と和解に焦点をあて考察するものである。

## (1) アクセルとベアトリスの絆の行方

アクセルとベアトリスの老夫婦は60人ほどのブリトン人の村で、丘の斜面に掘った深い横穴の住居で暮らしているが、どういう訳か蠟燭を使用することを禁じられ、夜は暗闇のなかで過ごしている。アクセルは正体不明の喪失感を抱きながら暮らしているが、その理由が彼にははっきりとはわからない。自分たち夫婦はいつもこうして暮らしてきたのか、この村の端でいつも二人だけでこのように暮らしてきたのかと自分に問いかけても、記憶の断片がいくつか思い浮かぶだけで明瞭な記憶がない。だがアクセルとベアトリス夫婦だけでなく、村全体が同じ状況で、集団的に記憶喪失の状態に陥っている。

For in this community the past was rarely discussed. I do not mean that it was taboo. I mean that it had somehow faded into a mist as dense as that which hung over the marshes. It simply did not occur to

those villagers to think about the past—even the recent one. (p.7)

この村では過去のことがめったに語られることはないのです。タブーというのではありません。沼地を覆う濃い霧のように過去が次第に薄れていくのです。たとえ最近のことであっても、過去についてあれこれ考えるなど村人には思いもよらないことだった。

この村では過去が語られることはめったにない。それほど遠くない昔にこの村には優れた治療の技を持つ赤い長い髪の女がいて村の宝物のように扱われていたが、その女がいなくなっても残念がるものはいないし、何故いなくなっただのかと不思議に思うこともない。ただ村人たちの記憶からは消えているのだ。そんなある朝、季節は春だがまだ寒さの残る朝に、草のベッドを抜け出したアクセルは地平線に明るさが拡がりつつある薄明かりのなかで、長い間引き延ばしてきた重要な決断をする時が近いという予感がする。重大な決断というのは夫婦で旅に出ようという決心であるが、旅の話がどのような経緯で始まったのか、それがふたりにとって何を意味することであったのか、思い出せなくなっていたのだ。しかしその朝のアクセルは、ふたりの間で最初に旅に出るという話題が出たのは、黒いほろをまとった見知らぬ旅の女がこの村を通りかかった、数か月前の日からだと思い出す。ベアトリスは村の女たちが悪魔 (demon) と呼んで近づきたがらない旅の女の話をしてひとりで熱心に聞いたのだが、その話がベアトリスに旅に出る決心をさせたことも思い出す。「問題なのは、私たちが他に何を忘れてるかです (It's what else we're not remembering.)」「あなたが昔から反対だったのは知っています、アクセル。でももう考えなおすべき時ではないかしら。旅に出ましょう。これ以上遅らせてはだめ。 (You've long set your heart against it, Axl, I know. But it's time now to think on it anew. There's a journey we must go on, and no more delay. p.19)」ベアトリスが思い出したことは、旅に出ることを彼女はいつも望み、アクセルはいつも反対であったこと、そしてその話題が持ち出されるとふたりはなぜか奇妙に居心地が悪くなるということであったが、その理由は旅の間に徐々に解明されていくことになる。更に村の司祭か

ら蠟燭をとりあげられ怒りが燃え上がった際に何かが刺激されたのか、ベアトリスは息子のことを突如として思い出し、息子が住む村に旅に出ることを思いつく。こうしてアクセルとベアトリスの老夫婦は旅の目的が息子に会うことで、行先は息子が住む村だということを思い出すのだが、不思議なことにふたりともなぜここに息子が一緒にいないのかわからない。息子の顔や声も思い出せないし、今どこに息子が住んでいるのかも思い出すことができない。当然どうやって息子の村を見つければいいのかわからない。しかし「道はわかります。(I believe we'll know our way well enough.)」「さほどの困難もなく見つけられるはずですよ (we'll find it within little trouble. p.28)」となぜか楽観的なベアトリスの言葉で、アクセルはやっと旅に出る決心をすることになる。こうしていくつもの謎を抱えたまま、イシグロは読者をアクセルとベアトリスの旅に連れ出すことになる。

この時代のブリタニアの旅は困難で、アクセルとベアトリスが進む道には危険が潜んでいる。当時の道が今の道より遥かに危険が多かったことは容易に想像できるが、実際に曲がる場所を一つ間違えるだけで致命的な結果をもたらすこともあったし、道を外れるということは隠れ住む悪意の人間、動物、超自然の攻撃者に身をさらす危険が大きくなるということだった。足首の骨を折ったり、擦り傷を化膿させたりしたら生命の危険に直結したのだ。悪霊や悪鬼は最後尾にいる者を最初に襲うという理由から、旅のあいだ狭い道では常にベアトリスが先に進み、アクセルがそのあとに続いていく。二人は始終声をかけお互いの存在を確認しながら荒野を進んでいくが、ベアトリスに対してアクセルは常に「お姫様 (princess)」とまるで騎士が女性に接するように呼び掛けている。その意味もまたこの旅を続けていくうちに明らかになる。またお互いに声を掛け合って進んで行く様子は、物語が進行するにつれて、不安定になっていくふたりの愛情と絆の確認行為とイメージが重なっていくことがわかる。

ベアトリスが忘れていた記憶を取り戻したいと願う契機となったのは村を通りかかった旅の女との話であることは上述したが、その思いをさらに強めることになるのは、サクソンの村に行く途中の廃墟で出会った船頭との話で

ある。雨宿りの場所を求め、ベアトリスが過去に訪れたと記憶している古い屋敷に二人は向かう。その廃屋は本道から外れ脇道に入り腰までもある草木をかき分けて辿り着いた、ローマがブリトン人を支配していた時代の豪壮な屋敷跡で、いまでは壁も崩壊が進み色あせたタイルの隙間からは雑草が伸びている。僅かに残った壁と天井に囲まれて雨風をしのげる空間に、一匹の兎を掴んだ老婆と背の高い痩せた船頭の先客がいる。老婆は、ひとりしか乗せることができないという船に乗り、40数年ほとんど一日も離れず共に暮らした夫がこの船頭に島に連れ去られてしまい、離れ離れにされてしまったことに激しい恨みを抱いていることがわかる。ここで聞くことになる老婆と船頭の話は、作品の結末の場面までベアトリスの最大の関心事となっている。ベアトリスの関心を引いたのは、夫婦ふたりで一緒に島に渡る為には、ふたりの絆が強くないと否定する船頭の言葉である。そしてふたりを共に船に乗せる条件であるという、夫婦の絆の強さを知るために船頭が渡し船に乗せる前に行う質問がどのようなものであるかに、ベアトリスの関心がさらに向けられている。問われた船頭の答えは以下のようなものである。

If it's a couple such as you speak of, who claim their bond is so strong, then I must ask them to put their most cherished memories before me.  
(p.47)

強い絆で結ばれていて一緒に渡りたいという夫婦には、一番大切にしている記憶を話してくれるようお願いします。

夫婦別々に、それぞれが一番大切に思っている記憶を話してもらい、ふたりの絆の深さを確かめるということなのだが、船頭の見解では愛によって結ばれていると語るふたりのなかに、恨みや怒り、時には憎しみすら見ることがあり、年月を超える不変の愛 (abiding love that has endured the years, p.47) などはめったに見られるものではないということである。船頭から聞く話は、旅に出る前に黒いぼろを着た旅の女から聞いた話と重なるところがあ



り、ベアトリスの不安を募らせていくことになる。

But she went on speaking, about how this land had become cursed with a mist of forgetfulness,.... And then she asked me: “How will you and your husband prove your love for each other when you can’t remember the past you’ve shared?” (p.48)

でも彼女（旅の女）の話は続いて、この国は健忘の霧に呪われていると話したの。…そしてこう尋ねたのよ。「分かち合ってきた過去を思い出せないのなら、夫婦の愛をどう証明すればいいの」

ベアトリスには息子の顔やいなくなった理由、アクセルとの喧嘩の思い出も楽しかった時のことも思い出せない。夫婦の一番大切な記憶は何かと尋ねられても記憶がないのだから答えることができない。過去を思い出せないのであれば、どうやって夫婦の愛を証明したらいいのかとベアトリスの不安は募っていく。その不安からベアトリスの関心はいかにして記憶を取り戻せばいいのかということに向けられていくことになる。

旅の一日目の夕方にベアトリスたちはサクソン人の村に辿り着くが、村の長老でサクソン人の妻を持つブリトン人のアイバー (Ivor) からサクソン人の村でも人々の間で物忘れが激しいことを知らされる。ブリトン人の間で「霧」と呼ばれている奇妙な物忘れがサクソン人の村でも蔓延していることを聞かされたベアトリスは、記憶を取り戻すために「霧」への関心がますます強まっていく。しかしアクセル夫婦も長老アイバーも「霧」の原因、正体はわかっておらず、それは山道を登った先にある修道院の賢僧ジョナス (Jonus) の解釈を待たなくてはならない。

旅の遠回りをして修道院までジョナスに会いに来た本来の目的はベアトリスの体調についての相談であったのだが、彼女の関心は、ほんの少し前のことを何年も前の出来事同様にすっかり忘れさせてしまう「霧」にしかないことがわかる。ベアトリスに「霧」の原因を問われると、その場にいたウイスタンがまず、ここの修道僧らに守られている雌竜クリエグが霧の原因である



ことを告げる。続いてジョナスが霧の正体についてウイスタンの言葉が真実であると認め、謎の霧の正体が明らかにされる。

‘Father Jonus, can this be true?’ Beatrice asked. ‘The mist is the work of this she-dragon?’

The monk,...turned to Beatrice.... ‘It’s Querig’s breath which fills this land and robs us of memories. (p.168)

「ほんとうですか、ジョナス神父様」ベアトリスが尋ねた。「霧が竜の仕業だというのは」

僧はベアトリスのほうを向き…「クリエグの息がこの地を満たし、私たちの記憶を奪います」

クリエグの息はこの地を満たし人々の記憶を奪っているが、霧は良い記憶だけでなく悪い記憶もまた覆い隠すものであることをジョナスは指摘する。さらに霧が晴れたときは好ましい記憶だけでなく同時に、封印していた忌まわしい記憶もまた現れることを告げられる。しかしベアトリスは霧の原因が明らかにされ有頂天である。何故なら、クリエグが退治されて霧が晴れるとアクセルとの大切な過去の記憶を取り戻すことができる。そうすれば船頭に夫婦の絆の強さを示すことができ、ふたりで島に渡るができると思えてくるからである。悪い記憶も恐れないかと問われたベアトリスは、アクセルと自分の心にはお互いへの思いがあると顔を輝かせ、少しの疑念も示すことはない。夫婦の愛情と絆に強い確信を持っているようである。この場面でベアトリスのなかにある島とは、息子が住む島というのではなく、ふたりで行くところという漠然としたイメージであり、彼女の関心は島に渡る前に試される夫婦の愛情と絆に向けられている。

ところがベアトリスの心に変化の兆しが見え始めるのは、より早く息子の村に着こうと川を下るときである。船小屋の男から一人ずつ乗れる籠をふたつ借り、離れ離れが嫌と言うベアトリスの望みで二つの籠を繋いで川を下っていく。籠の中の狭い空間にひとりで閉じ込められたせい、川に流されな

がらベアトリスはかつてアクセルが自分を残して家を出て行ったこと、息子のことを突如として思い出す。

‘Axl. I thought maybe you’d left me again.... I don’t know if it’s a thing dreamt or remembered.... I think I was standing that way because you’d gone and left me, Axl.... You’d left me that night, Axl. And our precious son too. He’d left a day or two before, saying he’d no wish to be at home when you returned. So it was just me alone, in our former chamber, the dead of night. (p.247)

「アクセル、また私を置いていったのではないかと思ったわ。…夢だったのかほんとうのことだったのかわからないけど。…あなたがいなくなって取り残されたからそんなふう立っていたのだと思うわ、アクセル。…あの夜あなたは私を置いて出て行ったわ、アクセル。私たちの大切な息子もね。息子はあなたが戻った時に家にいたくないと言って、あの夜のほんの一、二日前に出て行きました。だから私は真夜中に以前の部屋に独りぼっちだったの」

思い出した光景が果たして夢であったのか、それとも現実に起こったことなのかは曖昧であるが、アクセルが家を出て行き、アクセルが戻った時に家にいたくないという息子も出て行って、真夜中にひとり取り残されたことがベアトリスの脳裏に浮かんだのは確かである。そしてこれを契機に「霧のせいでたくさん忘れてしまったもの。ふたりがお互いのことを忘れることがないとは言えない。(This mist makes us forget so much. Why should it not make us forget each other? p.249)」と、信じていた絆に不安を感じ始めたベアトリスは「私を忘れないでね、アクセル」と何度もアクセルに懇願するようになる。

次に、アクセルとベアトリスが再び息子の村への旅を遠回りして、険しい山道を登り一匹の山羊を巨人のケルンまで連れて行こうとしている場面を目を転じてみよう。巨人のケルンはクエリグの餌が置かれているという場所で、アクセルたちが川で濡れた衣類を乾かし、体を火で温めようと立ち寄っ

た石造りの家で、少女に依頼される。少女は毒の餌を食べ続けさせた山羊をクエリグに与え、あわよくばクエリグを殺したいと願っている。その理由だが、少女と二人の弟たちの父母はどこかに行ったまま帰ってこないが、両親が自分たちのことを忘れていたのは山の上にいる雌竜クエリグのせいであり、クエリグが退治されたら母親たちは自分たちのことを思い出して戻ってくると教えられているからだ。アクセルは少女の願いを叶えることに気が進まないが、ベアトリスのほうは少女の願いを聞き入れようと熱心にアクセルを説得する。

'Will a chance like this ever come our way again? Think on it! We stumble to this spot so near Querig's lair. And these children offer a poisonous goat by which even the two of us, old and weak though we are, might bring down the she-dragon! Think on it, Axl! If Querig falls, the mist will fast begin to clear.' (p.279)

「こんな機会は二度とこないかもしれないわ。考えてみて。クエリグの巣の近くにたまたま来ていて、あの子供たちが毒入りの山羊を用意してくれていて、それを使えば私たちのような老いて弱いふたりでも、雌竜を倒せることができるかもしれません。考えてみて、アクセル。クエリグが倒れたら、霧はすぐに晴れ始めるのですよ」

アクセルとベアトリスの旅の目的は息子の村に行くことであるし、「物忘れの霧」の原因がクエリグの息であると知らされても老いて体力がないベアトリスにできることは何もない。霧が晴れて夫婦の大切な思い出が蘇ることを願いながらも、積極的にクエリグ退治に関わることはできなかった。ところが少女の懇願を知り、ただ毒入りの山羊をクエリグの餌場に置いてその場を離れるだけで、老いて弱い自分たちでもクエリグを倒せるかもしれない、クエリグを倒せば霧が晴れるのだと思われてくると、その思いが強い動機となり年寄りには過酷な、風が強くて細い山道を登らせていくことになる。漸く岩の間の風よけの避難場所に腰を下ろしたベアトリスは、雌竜を本当に倒すことができ霧が晴れ始めた時には、忘れていた何が見えてくるのかとアクセル

ルに問いかける。あれほど望んでいたことなのに、霧が晴れることを恐れている自分があると、芽生えてきた不安を口にする。さらに「あなたがわたしから離れて歩きたがっているみたい (It's as if you're holding yourself away from me as we walk, p.271)」と、アクセルとの間の隔たりについて初めて言葉にするのである。クリエグの霧のせいなのか、実はこの時ベアトリスは自分が少し前に言ったことを既に忘れていたのだが、山登りをする前の少女の家で束の間の眠りから覚めた時に、彼女には昔の辛い記憶がかなり明瞭に戻ってきていたのである。それはアクセルが昔、夜にベアトリスをひとり残してほかの女性のところに行ってしまったこと、そしてそれを思い出したせいで、これからの旅でアクセルの横に並んで歩くのは嫌だという感情である。ベアトリスがこうしたことを口にするのはアクセルにとってかなり衝撃的なことであったが、彼女は再び眠りに陥り自分の語ったことを忘れてしまい、そのあとは「何か喧嘩でもしたかしら」程度の記憶しか残っていない。記憶を取り戻していくことはふたりの愛情を確認するための望ましい工程であったはずが、皮肉にも徐々に幸せではなかった記憶が浮かび上がり、ふたりの絆に不信感を抱く結果になろうとしていることが示唆されている。

巨人のケルンにはアクセル夫婦の他に、まるで何かの力に引き寄せられるようにして騎士ガウェイン、戦士ウィスタンとエドウィンが集まってくる。ともに目指すはクリエグである。巨人のケルンに子羊を繋ぐことで少女との約束を果たしたアクセルは早々に下山しようとするが、体力が衰えているにもかかわらずベアトリスはさらに登ってクエリグの退治を目撃したいと言い張り、翻意しない。クリエグの退治を目前にしたいま、ベアトリスが取り戻した記憶は期待に反して彼女を不安にさせるものであった。これまでは霧が晴れることを望んでいたが、いまではむしろ霧が晴れるのを恐れているのはアクセルではなくて自分であると思えてくる。アクセルを傷つける何か悪いことをしたのではないかと、漠然とした不安が募っているのだ。それでもベアトリスには、一緒に歩いてきた道なのだから、良いことも悪いこともあるがままに振り返ろうという前向きな決意が窺える。

クリエグとガウェインの最期を見届けたあと、アクセルとベアトリスはガ

ウェインが残した軍馬ホレスに乗り雨の中を進み、疲れ果てた様子で息子の島に渡れるという船着き場にやっとのことで辿り着く。既にクリエグは殺されたのだから、記憶をなくしてしまう霧も晴れてきていることになる。ベアトリスがここに至りどのような記憶を取り戻しているのかについては、彼女自身の口からは詳細には語られないので、船頭とアクセルの会話から推測するほかはない。ただ、入江の向こうに見える島に息子が住んでいるとベアトリスが語ることからすれば、クリエグの霧のなかに忘れ去られていた、過去の痛ましい記憶が戻っていると考えるのが妥当だろう。息子は死んだのだと。夫婦の間に封印されていた痛ましい記憶がどのようなものであるかについては、クリエグが退治され多くの記憶が戻ってきたアクセルから直接明らかにされる。この旅の目的は息子に会いに行くことであったが、既にその息子は家を出たあと疫病か何かで亡くなっており、お墓はこの近くの森か島のどこかにあるらしいという痛ましい事実である。しかも息子の家出の原因は確かにアクセルとベアトリスの二人に責任があるという。アクセルの記憶によればベアトリスはほんの短い間だが、ほかの男と不実を働いたことがあったという。ベアトリスもまたほんの一瞬だが記憶を取り戻し、アクセルには他に女性がいたことを思い出している。その時のベアトリスの記憶は曖昧であったが、この場面でのアクセルの記憶はかなり明確なものであることから、ベアトリスに不実な行動があったことは事実であると推測される。一方アクセルは自分がした「何かが」彼女を別の男の腕の中に追いやったと曖昧にしか語らないので、本当のことは分からない。しかしいずれにせよ、当時のふたりの不穏な関係に嫌気がさした息子は家を出て行きその後亡くなった訳であるから、アクセルとベアトリスの間に深い傷と溝を作り出したことは容易に想像できる。息子の死の誘因となった自分たちの不実の記憶を取り戻したことは痛ましいのだが、夫婦の関係については心から和解したとアクセルは語る。寧ろそれ以上に夫婦の心に深い傷を与えてきたのは、息子の墓に行くことをアクセルが自分にも妻にも禁じたことである。息子が眠る墓に一緒に行きたがるベアトリスの要求を、アクセルが今日まで拒否し続けてきたことがふたりの間に亀裂を生じさせたのだが、そのことも霧で覆い隠されて

きたのであった。記憶が蘇った今、妻に対する冷酷な仕打ちは自らの自尊心からくる愚かさであったとアクセルは認めるが、それはまた人間の心の奥底に潜む正体不明の存在であったことを認めている。

It was just foolishness and pride. And whatever else lurks in the depths of a man's heart. Perhaps it was a craving to punish, sir. I spoke and acted forgiveness, yet kept locked through long years some small chamber in my heart that yearned for vengeance. (p.340)

ただ愚かだっただけです、それと自尊心。そして人の心の奥底に潜む何かが。もしかしたら罰したいという欲望だったかもしれません。私は許しを説き実行していました。しかし心に復讐を望む小さな部屋をつくって、そこに長い間鍵をかけてきました。

ベアトリスに対してアクセルは「復讐を望む」小さな部屋を自分の心のなかにつくり、そこに長い間鍵をかけてきたというのである。記憶は人間の意識の働きのひとつであり、精神世界に即したものであるから、息子の墓参りを禁じたという行為に封印することはアクセルの意識のなかでは大きな意味を持っていたといえる。そしておそらく記憶を取り戻しているはずのベアトリスがこの件に関して船頭に何も語らなかったということは、いかにそれが彼女を傷つけてきたかを物語っている。

封印されていたすべての記憶が戻ってきたときベアトリスがどのような心理状態であったのか、アクセルに対してどのような感情を抱くようになったかについては、作品の結末では明確に表現されておらず曖昧であるので、いくつかの解釈が可能である。旅の始まりから始終アクセルの傍にいたいと願ってきたベアトリスであるが、妻と一緒に島に行きたいと最後まで船頭に執拗に懇願するアクセルをなだめ、穏やかな表情で息子が待つ島に渡って行く。この時のベアトリスの心を覗く手がかりとして結末のアクセルとの会話を見てみよう。

‘Are you glad of the mist’s fading?’

‘It may bring horrors to this land. Yet for us it fades just in time.’

‘I was wondering, princess. Could it be our love would never have grown so strong down the years had the mist not robbed us the way it did? Perhaps it allowed old wounds to heal’

‘What does it matter now, Axl?’ (pp.344-5)

「お前は霧が晴れることを喜んでいるのかい」

「この国に恐怖をもたらすかもしれないわ。でも私たちにはちょうど間に合って晴れたわ」

「私はこう思うよ、お姫様。霧にこんなふうに奪われなかったら私たちの愛はこの年月をかけてこれほど強くなれただろうか。霧のおかげで傷が癒えたのかもしれない。」

「いまはもうどうでもよくはない、アクセル」

ベアトリスが旅に出る決心をしたのは村を通りかかった女性から聞いた話が契機となった。夫婦ふたりを一緒に島に送るといふ船頭が約束を破り、夫だけを島に運び彼女をひとり取り残したので、それ以来旅の女は国中を放浪することになったという。旅の途中雨宿りをしたローマ時代の廃墟で出会った老婆と船頭の話から、ベアトリスは夫婦の深い絆がふたり一緒に船に乗れる条件だと知る。そしてその絆の深さは夫婦が大切な思い出を共有しているかどうかで判断されると知らされる。常にふたりでいたいということがベアトリスの願望であるから、記憶を失っている今の状態では大切なことも思い出すことができないと不安が募る。そのうちに記憶を失っている原因がクリエグの息が生む霧にあることを知らされ、それからは記憶を取り戻すためにクリエグの退治を願う。クリエグが殺されやっとな記憶を取り戻すことができたのだが、そこに蘇ってきたのは痛ましい事実であった。あれほどふたりで船に乗ることを切望していたのに、最後の場面のベアトリスはひとりで船に乗ることを穏やかに受け入れている。別れはほんの一瞬だけで、霧が晴れたらいくらでも話すことができると、ベアトリスはひとりでは島へ行かせたくない



いアクセルに語りかける。ここでベアトリスが口にする、霧が晴れるのがふたりにはちょうど間に合った、とはどのような意味であろうか。この言葉がベアトリスの心の在り方を表象するものであることは間違いない。更に、霧のおかげで愛が強まった、傷が癒されたのではないかと、ふたりの間の絆の強さを再確認させようとするアクセルに、「いまはもうどうでもいいわ、アクセル (What does it matter now, Axl? p.345)」となげやりで無関心のごとく答えるのは何故なのか。ベアトリスがこのように曖昧な表現をするのは、まだ霧がすっかり晴れておらず、これまでのように思い出した次の瞬間にはまた一時的に記憶をなくしてしまったからであろうか。いやそうではなく、ベアトリスには記憶が回復し全ての過去を取り戻していると考えるほうがいだろう。振り返れば、旅の最初に立ち寄ったサクソン人の村に、ベアトリスは自分の薬を取りに何度か来ていたことがわかるし、ジョナスに会うために険しい道を修道院へと進んだ目的もベアトリスを診察してもらう為であった。ベアトリスの体は病魔に取りつかれていることはいくつかの場面で示唆されているが、霧により自分の病のことすら忘れていた。しかし霧が晴れ、記憶を取り戻した時、他の記憶とともにおそらく自らの病のことも思い出したのだ、最期が近いということも。最後の場面でベアトリスがひとりで島に渡ることを穏やかに受け入れていることがそれを証明していよう。愛情の強さを確認するために失っていた記憶を取り戻すことを望んだが、それはふたりの愛にかつて亀裂が生じたことを再確認する結果となった。だが、ベアトリスの言葉を信じるなら、離れ離れになる直前に間に合い、過去の事実をすべて受け入れ、和解を認識し、そして新たな忘却の旅にひとりで踏み出す決心をしたと解釈できる。

記憶がなくなったら愛も干上がるのではないかと心配し、愛を深めるために記憶を取り戻そうとしたのがベアトリスだった。しかしベアトリスが取り戻した楽しい思い出とは、彼女が市場から卵を持ち帰るときの乱暴な歩き方で、籠の中の卵が傷つきはしないかと心配したアクセルが家までずっと横に張り付いていたこと、というごく普通のありふれたものだった。逆に辛い思い出は、彼女の不実、夫との不和、それが誘因となった息子の死、まるで復

讐をするかのように息子の墓参りを許さなかった夫という、かなり衝撃的で悲しい出来事の記憶であった。徐々に記憶を取り戻していく過程では、意識下に強く働きかける印象の強かったものから思い出すはずである。作品冒頭の場面でベアトリスが思い出すのは、アクセルが旅に出ることをずっと昔から反対していたということだった。これは息子の墓参りを禁じたアクセルの小さな復讐がどれ程ベアトリスを傷つけ残酷であったかということが、既にここで示唆されていることがわかる。彼女が思い出した記憶の断片を集めると、ベアトリスの関心の中身はアクセルとの個人的な関係に起因するものばかりである。

一方アクセルにはどのような記憶がいかにして蘇ってくるのであろうか、アクセルの側に視点を置いてみよう。最初から最後まで変わることなくアクセルはまるで騎士が女性を庇護するかのように献身的にベアトリスを支えているが、断片的ではあるが取り戻していく記憶の内容には実はベアトリスとは異なるものがある。アクセルが取り戻した記憶の断片は直ちに一つに繋がって明瞭な形となるものではなかったが、予期しない言葉や動作により断片的ではあるが突如として忘却の彼方から蘇ってくるものがあった。その覚醒の瞬間のいくつかを辿ってみよう。旅に出る前、同胞の村でベアトリスが蠟燭を取りあげられる出来事があったが、その時に不意にベアトリスが呟いた「息子」という言葉はアクセルの心を騒がせ、気を失いそうになるほど多くの記憶の断片を溢れさせる。これはアクセルのなかにベアトリスと同様に、息子にかかわる記憶の周辺に重大な何かがあることを示唆している。ところが、旅に出て最初に雨宿りで入った廃屋でのベアトリスの関心は船頭が話した、強い愛情で結ばれているふたりだけが一緒に島に渡れるということに向けられているのだが、アクセルのほうは同じ船頭が戦争や焼け落ちた家のことを話したとき、ベアトリスの関心とは全く異なるどこか記憶の彼方へと向けられており、そこから何か蘇ってくるような感覚があるようだ。

サクソン人の村では、初めて出会うウイスタンを観察して、長い髪の一部を革紐で結んで前に垂れないようにしているのは戦いに備えているためだという考えが自然に湧いてきて、然もそれはアクセルのいつも身近にあった感

覚のように思えるのだ。そしてウイスタンが手を剣の柄に置く動作を見ると、アクセルには何故か安心と恐怖の入り混じった不思議な感情が湧いてくる。アクセルは朝まだ眠っている妻を眺めることにいつも喜びを感じていたのだが、ウイスタンを見た次の朝は何故だかいつもの喜びの感情のなかに、少しの悲しみが混じっていると感じる。正体不明の何かが自分のなかで動き出しているという意識が芽生えているのだ。次にアクセルが思い出したのは、どこかの村の市場か祭りで緑のマントを着たベアトリスと歩いていたことだが、記憶は朧気であるものの、ベアトリスがマントのことでアクセルを「責めた」ということは思い出したようだ。また、ウイスタンとガウェインの話聞いていた時には、軍隊が戦場近くに組み立てるような大きなテントの中にいる自分の姿が曖昧な記憶のなかに浮かび上がってくる。外では風が吹き、テントのなかで激しく揺れる蠟燭の炎の向こうに顔は分からないが何人かいる光景である。さらに、ブレヌス卿の兵士が見せた敵に対する馬の見事な位置取りを認識したときに、アクセルは心の奥底に眠っていた記憶の断片をかなり明確に浮かび上がらせる。その記憶のなかでアクセルは馬上にあり、ハービーという名前が浮かんだ同僚がサクソン人の村で鞭か棍棒を使って村人に襲い掛かっている。村を訪れた目的は思い出せないが、アクセルには自らが感じた怒りと子供の泣き声、村人の憎しみの表情が蘇っている。さらに修道院の場面では、追手から逃れるために入ったトンネルをガウェインの助けで無事抜け出すのだが、これまでに思い出した記憶の断片を集めたアクセルは、遠い昔には同志ではなかったかと、自分の過去の姿についてガウェインに確かめる。

‘The mist hangs heavily across my past,...Yet lately I find myself reminded of some task, and one of gravity, with which I was once entrusted.... Your presence, and your talk of Arthur, stirs long-faded thoughts, Sir Gawain.’(p.196)

「私の過去は濃い霧に覆われています。ですが最近、ある任務を思い出すことがあるのです。私に託された重大な任務を。あなたの存在と、あなたの語るアーサー王の

話が、長く隠れていた記憶を騒がせませす、ガウエイン卿。」

アクセルの記憶は依然として濃い霧の中であるが、それでも昔自分がガウエインと共にアーサー王のもとで重要な任務を与えられていたのではないかと思えてくるのだ。

ふたつの籠に入り川を下る途中では、葦に捕らわれたベアトリスの籠に川のなかから出てきた多くの小妖精が襲い掛かる。アクセルはベアトリスを守ろうとして長柄の道具をその生き物に振り下ろすが、「遠い過去の記憶から呼びもどされた戦士の雄たけびをあげながら (a warrior's bellow that came to him as if from a distant memory, p.253)」、自分が剣士としてはそれほどの腕前ではなくて、むしろ自分の能力は交渉、謀にあり、その能力により信頼を勝ち得たこと、そしてその信頼を自分からは裏切ったことはないが、逆に裏切られたことがあったことを思い出す。アクセルが思い出した交渉の能力とは、アーサー王の騎士として、ブリトン人と敵対するサクソン人との間に和平協定を成立させて、戦いを終わらせることで平和の騎士と呼ばれたことであり、裏切られたこととは和平協定の下で無防備であったサクソン人の村人をアーサー王の命令で騎士たちが皆殺しにしたことである。この殺戮については既に騎士ガウエインの追憶の章でも語られているので、ここでアクセルはかなり明瞭に過去の騎士としての自分の記憶を取り戻しているのがわかる。ところで、籠で川を下るときベアトリスがアクセルに向かって、「また私を置いて行ったのではないか」「あなたがいなくなって、取り残された」そして「息子は家にいたくないと出て行き、一人きりになった」とベアトリスの脳裏に眠っていた痛ましい記憶の核心に触れる言葉を口にしたとき、それはとんでもない変な夢で、寒さで熱が出かかっているせいだとして、アクセルは取り合わず曖昧に答える。戦士ウイスタンや騎士ガウエインとの遭遇で、騎士であった自分の過去のことはかなり明瞭に思い出しているアクセルであるのに、ここでベアトリスの言葉が意味することが本当にアクセルに理解できていないかどうかは疑わしい。あるいは夫婦という個人間の問題とより大きな共同体とでは、封印したい痛ましい記憶の覚醒に何らかの理由が

あってタイムラグが生じているのだろうか。ベアトリスに戻ってきた記憶とアクセルは対峙しようとはしないのだが、あなたと横に並んで歩くのは嫌だと口走るベアトリスに対してアクセルが衝撃を受けているのは確かである。ここで拙論冒頭の引用の部分に戻ってみよう。この時のベアトリスは、アクセルのこころを悲しみで満たす原因となった自分の言葉については既に忘れていている。振りかえってみれば、この場面に至るまでアクセルは霧が晴れて記憶が戻ることをベアトリスほど積極的には望んでいないことがわかる。記憶が戻ることは常に正体不明の漠然とした不安を抱いているが、それでもベアトリスとの関係においては、たとえどの様なことを思い出しても絆が壊れることはないと思っていた。ところがこの場面ではアクセルの気持ちに変化が生じ、自信が揺らいでいることがわかる。嫌な記憶が戻ったとしてもいまの気持ちを忘れないで欲しいと願うアクセルであるが、具体的な描写はないものの、アクセルにはベアトリスとの関係に於いて封印していた記憶の何かが戻りかけていると推測したほうがいだろう。その内容については巨人のケルンへ向かうときに、ベアトリスのなかに明らかな怒りと恨みの影を感じ取り、驚愕するアクセルの様子から、徐々に明らかになっている。

巨人のケルンで再び合流した老騎士ガウェインはアクセルがアーサー王のもとを去ることになった出来事を語る。アクセルはクリエグの息のせいでそのことについては何も覚えていないと返答するが、アクセルの尽力で締結した和平の法に話が及ぶやいなやそれに反応することから、アクセルには騎士であった記憶が既に戻っていることが露見する。一方ベアトリスとの間に封印していた記憶に関しては、霧が晴れ記憶が戻ることを願ってクリエグ退治を見届けたいベアトリスを、なんとか理由を付けて山を下り引き返そうと説得するアクセルの様子から想像できる。「私と妻はクリエグの最期を見届けに来ています (we're now here to see the end of Querig (p.313))」と語り、結局はアクセルもクリエグ退治を見届けることに同意するのだが、それはベアトリスの断固とした決意を変えることができなかったからである。

'Here, Axl, take my hand and help me keep my courage. For I'm

thinking now I'm the one to fear most the mist's clearing, not you. I stood beside those stones just now and it came to me there were dark things I did to you once, husband.' (p.307)

さあ、アクセル、私の手を取って、勇気が萎えそうな私を助けて。だって、霧が晴れるのを恐れているのは、あなたより、むしろ私だわ。さっきあの石の傍に立っていた時、不意に昔あなたにひどいことをしたような気がしました。

どんな記憶が蘇ろうともそれに対峙するというベアトリスの決意に負けてクリエグの最期を見届けることにするアクセルだが、同時にアクセルにはひとりで蠟燭を手にも孤独のうちに部屋にいたのはベアトリスではなくて自分ではないかという記憶が戻っているのだ。ところで「蠟燭」は作品中では場面展開の小道具としての役割を演じている。多くを忘れていたベアトリスが不意に「息子」を思い浮かべるのは、村の仲間から蠟燭を取り上げられる争いの場面であったし、アクセルがベアトリスとの過去の溝を思い出す場面にも蠟燭は登場する。ブリトン人の村で暮らしていたときアクセル達は穴のなかの住居で何故か蠟燭を使うことを禁じられて、真っ暗な夜を過ごしていたが、蠟燭の灯りがやがて暗闇に隠されていた真実を明らかにしていくメタファーとして用いられていることは容易に推測できる。

作品結末の場面に視線を転じてみよう。船頭がベアトリスから話を聞いている間、一人離れた場所にいるアクセルの夕日を浴びた顔には深い悲しみがあり、目には小さな涙も浮かんでいる。多くの記憶を取り戻したアクセルが導きだした結論は、以下の船頭への言葉に表現されている。

I think now it's no single thing changed my heart, but it was gradually won back by the years shared between us. That may be all it was, boatman. A wound that healed slowly, but heal it did.... I suppose there's some would hear my words and think our love flawed and broken. But God will know the slow tread of an old couple's love for each other, and understand how black shadows make part of its whole.

(pp.340-341)

いま思うのは、なにか一つのきっかけで心が変わったのではなく、ふたりで分かち合ってきた歳月の積み重ねが徐々に変えていったということです。それが全てかもしれません、船頭さん。ゆっくりしか治らないが、でも結局は治る傷のようなものでしょう。…私たちの話を聞いて、私達の愛情には傷があるとか壊れているとか考える人もいるでしょう。しかし老夫婦の相互への愛情が緩やかに進むこと、黒い影も愛情全体の一部であることを、神様もわかってくださるでしょう。

アクセルが思い出した記憶にはふたつの様相がある。かつてはアーサー王の騎士のひとりで異なる民族間に平和をもたらす法、条約を成立させることに尽力したが、更なる平和を希求するという大義を掲げ、和平締結により無防備であった異民族の村でアーサー王の騎士たちが殺戮を行い、アクセルはそれが原因でアーサー王のもとから立ち去ったこと。そのあと異民族間で復讐の連鎖が起こることを防ぐため、雌竜クエリグにマーリンが魔術をかけ、その息の効力でブリトン人、サクソン人が共に記憶をなくし、復讐の連鎖はクリエグの息で表面上は止められていることであった。もう一つはベアトリスとの夫婦間の軋轢である。アクセルの側の不実については定かではないが、妻の側の不実は事実のようである。それが原因で息子を失うことになり、アクセルは妻に息子の墓参りを禁じたということである。アクセルが封印してきたものは、こころの奥底に存在する復讐の気持ちであり、墓参りを禁じる行為はその具現化であった。

最後の場面までアクセルはベアトリスのことを「お姫様 (princess)」と呼び、騎士が女性を保護するかなのような心遣いを止めることはないが、この呼びかけと心遣いはアクセルの意識下にある、墓参りを禁止したことに対する贖罪とも解釈できよう。そして常にベアトリスの傍に居るのは、かつてひとりにしたことから生じた不幸への悔恨が意識下で働いているのだ。アクセルが封印してきた「復讐」はベアトリスに対する個人的なものであったが、アクセルの騎士としての過去を重ね合わせると「復讐」はさらに多くの人々を巻き込む民族間の復讐にも繋がっている。歴史においては多くの征服者や支



配者たちが自らの側の、勝利者の視点からの「歴史的事実」を作り出してきた。アーサー王の命でマーリンはクリエグに魔法をかけることにより民族間の記憶をなくし、平和を維持するという大義により復讐と殺戮の連鎖を閉じ込めてきた。然しそれは同時に大義の為として行った勝利者側の殺戮、残虐行為を覆い隠す性質も持ち合わせていた。イシグロはこれまでの作品で、閉じ込めていた過去の記憶が蘇ってきて事実と直面したとき個人はどのように向き合うべきかという、記憶が個人に及ぼす影響に関心を向けてきた。その記憶は事実を鮮明に語るものであったり、時には都合のいいように歪曲、捏造され無意識のうちに書き換えられたものであったりしたが、いずれにせよ個人の間には於ける問題であった。しかしこの作品でイシグロは新たな試みとして、さらに大きな共同体の記憶を扱っている<sup>8</sup>。そこで次に民族間の和解と復讐という観点からウイスタンに焦点を当ててみよう。

## (2) 戦士ウイスターの復讐

ウイスタンが登場するのは第三章で、アクセルたちがサクソン人の村に到着した時である。村の広場で大きなかがり火が焚かれ大勢の村人がそれを取り巻いている。そこに現れたのが三十歳くらいの威厳のある男で、アクセルは明らかに村人とは違うこの男の立ち振舞いから戦士であることを見抜く。それもすさまじい破壊力をもたらす戦士であると。ウイスタンは村を通りかかったサクソン人であるが、悪鬼に連れ去られた十二歳の少年エドウィンの捜索に名乗り出て、救出に出かけるところである。これがアクセルとウイスタンが出会う場面だが、そのあとウイスタンとエドウィン、アクセル夫婦とともに修道院に向かい、修道院での襲撃のあとでは一時別行動となるが、巨人のケルンで再び合流し、クリエグ退治の場面まで行動を共にすることになる。アクセルと村で初めて言葉を交わしたとき、ウイスタンはアクセルの顔を見て何かを思い出したような素振りをするが、それには触れないまま、ともに旅を続けていく。ウイスターの旅の目的に関しては、修道院に向かう途

中で出会う騎士ガウェインとの会話と、敵なのか味方なのかを知りたいというアクセルの問いかけへの返答により明らかにされる。ウイスタンが語るころによれば、この地に住むサクソン人がブリトン人から迫害されているという噂を聞いたサクソンの王が、同胞のことを心配しウイスタンに視察を命じたということであるが、この説明には偽りが混じっていることがすぐわかる。ウイスタンを追ってきたブレヌス卿の兵士から、ウイスタンはクリエグを殺すよう命じられてこの国に来たと明らかにされると、ウイスタンは王から与えられた真の任務を認めるのだ。そしてブレヌス卿の兵士を倒したあとウイスタンは、ブレヌス卿はクリエグの強大な力を味方につけ、この国を征服し、サクソン人を迫害しようとしており、それを防ぐためにクリエグを殺す必要があるとアクセルに語る。しかしこの説明にもまた偽りが混じっており、全てを明らかにしてはいない。ここで疑問に思われるのは、ウイスタンは果たして過去の記憶をどの程度失っているかということである。明らかにアクセル夫婦よりは多くの記憶があると思われるが、アクセルがどのような人物であるのか、ウイスタンは明確に思い出していない。アクセルは昔知っていた人に似ているのかと尋ねられたウイスタンはこのように答える。

‘For when we met this morning, my heart leapt for joy. And yet before long...’ He went on looking at Axl silently, his eyes almost dreamlike. Then his face darkened, and rising to his feet again, the warrior turned away. (p.118)

「今朝お会いした時、こころが喜びでいっぱいになりましたから。でも、やがて…」ウイスタンはまるで夢でも見るような目つきで、黙ってアクセルを見続けた。そしてその顔が暗くなると、立ち上がって戦士はそっぽを向いた。

この場面のウイスタンはアクセルの正体をはっきりとは認識できていないと思われるが、かつて結ばれた法によりもたらされた平和が残虐な行為で踏みこじられたことは覚えているし、ブリトン人の騎士ガウェインのことも明確に覚えている。ここで注目すべきことは、アーサー王がブリトン人とサク

ソン人に恒久の平和をもたらしたことにより、ここでは両民族が互いに友であり同胞であり、もはや縁者であるとアーサー王の偉業を誇るガウエインに対して、「たとえそうだとしても、つい昨日自分の子を殺された人が、殺した男を同胞と呼ぶのは不自然ではありませんか、ガウエイン卿。(Even so, sir, isn't it a strange thing when a man calls another brother who only yesterday slaughtered his children? p.121)」とウイスタンが疑問を呈することである。ウイスタンは続けて、アーサー王はまさにその不自然を成し遂げたように見えると、一見アーサー王を称えるようなことを語るが、実はこの短い言葉のなかにウイスタンの任務の真の意図、彼の存在意義が示唆されている。ウイスタンは最後に真の任務の性質と自らの心の奥底にある強い怒りを明らかにするまでは、異民族であるアクセルやガウエインに本心を語ろうとはしないが、言葉の端々からは「復讐」の意思が明らかに読み取れる。ウイスタンは修道院に辿り着き内部を密かに調べたときに、この場所がかつてサクソン人の砦であり、今でこそ平和と祈りの場所であるけれど、血と恐怖の痕跡があるとアクセルに語る。この砦にはブリトン人を虐殺する仕掛けがあり、砦のサクソン人たちは残酷にも流血の場面を楽しんだというのである。

They've reached this, their sanctuary, only after long torment, death chasing at their heels. And now comes an invading army of overwhelming size. The fort may hold several days, perhaps even a week or two. But they know in the end they will face their own slaughter.... They know this is to come, and so must cherish the earlier days of the siege, when the enemy first pay the price for what they will later on. In other words, Master Axl, it's vengeance to be relished *in advance* by those not able to take it in its proper place. (pp.154-155)

苦難の長い道程を歩み、詩に追いかけられながら、ようやく聖域であるここに辿り着きました。そこへまた圧倒的な敵が攻めてきます。砦は数日もつかもしくせなし、もしかしたら一、二週間かもしくせなし。ですが最後には全員虐殺されること

がわかっています。…そういう結末が来ることを知っています。だからこそ包囲されて過ごす数日は、敵がのちの残虐行為の代償を先払いする数日は、大切にしないでほしくないのです。要するにアクセル殿、これは事前の復讐で、正しい順序では行えない人々による復讐の喜びの先取です。

ウイスタンが語るには、圧倒的な敵の襲撃でやがて全員虐殺されることが分かっているサクソン人は、殺戮される前に「復讐」の先取りとして、砦の罠に誘い込んだ敵を虐殺して楽しんだというのだ。虐殺と復讐の連鎖である。永遠に去ったはずの過去の蛮行であり忘れるべきというアクセルに対し、流された血に関しては自分のほうがより憎しみを感じていることをウイスタン認めて語るのだ。更に、私たちキリスト教の神は慈悲の神だという僧ジョナスに対して、異教徒のウイスタンは不正義を忘れて放置するのではなく、相応しい罰を与えるべきだと次のように反駁するのだ。

Is your Christian god one to be bribed so easily with self-inflicted pain and a few prayers? Does he care so little for justice left undone?...What use is a god with boundless mercy, sir? You mock me as a pagan, yet the gods of my ancestors pronounce clearly their ways and punish severely when we break their laws. (p.165)

あなたがたキリスト教徒の神は自傷行為や祈りの一言二言で簡単に買収される神なのですか。放置されたままの不正義のことなどどうでもいい神なのですか。…無限の慈悲をもつ神などなんの役に立つのですか。あなたは私を異教徒とあざけるが、我が祖先の神々は法を明確に示し、その法に背いた者を厳しく罰する神でした。

そしてクリエグの居場所に近づいたとき、ウイスタンはエドウィンに語り掛け、ブリトン人全てに対して憎悪を持ち続けるようにと強い口調で約束させる。

It was Britons under Arthur slaughtered our kind. It was Britons took

your mother and mine. We've a duty to hate every man, woman and child of their blood. So promise me this. Should I fall before I pass to you my skills, promise me you'll tend well this hatred in your heart. And should it ever flicker or threaten to die, shield it with care till the flame takes hold again. Will you promise me this, Master Edwin? (p.264)

我が同胞を殺戮したのはアーサー王配下のブリトン人だ。君や私の母を連れ去ったのもブリトン人だ。ブリトン人の血が流れる全ての男と女と子供を憎むのが我々の義務なのだ。だから約束してくれ。もし技の伝授を終える前に私が倒れても、君はここにこの憎しみを育て続けると。そしてもしその憎しみが揺らいだり消えそうになったりしたときは、また燃え上がらせると。そう約束してくれるか、エドウィン。

クリエグの巢の近くに、風が吹き荒れ地表が露になった所にそこだけ青々とした木立がある。ガウェインは魔術師マーリンの木立と名付けるその場所で、勝負を決するためにやがて相まみえることになるウイスタンを待ち受けている。ここに至って初めてガウェインは自分の任務がクリエグの護衛役であることを認め、クリエグ退治が任務であるウイスタンとは相反する立場であることがわかる。ブリトン人のガウェインとサクソン人のウイスターの対立する価値観は次の二人の会話に明確に語られている。

‘A dark man he(Merlin) may have been, but in this he did God’s will, not only Arthur’s. Without this she-dragon’s breath, would peace ever have come? Look how we live now, sir! Old foes as cousins, village by village. Master Wistan, you fall silent before this sight.’...Yes, we slaughtered plenty, I admit it, caring not who was strong and who weak. God may not have smiled at us, but we cleansed the land of war.’

‘What kind of god is it, sir, wishes wrongs to go forgotten and unpunished?’

‘Yet it’s long past and the bones lie sheltered beneath a pleasant green carpet. The young know nothing of them. I beg you leave this place, and let Querig do her work a while longer. Another season or two, that’s the most she’ll last. Yet even that may be long enough for old wounds to heal for ever, and eternal peace to hold among us.’

‘Foolishness, sir. How can old wounds heal while maggots linger so richly? Or a peace hold for ever built on slaughter and a magician’s trickery? I see how devoutly you wish it,... Yet they await in the soil as white bones for men to uncover.’ (pp.311-312)

「黒魔術師マーリンは神の意志で行ったかもしれぬ。この雌竜の息なしで永続する平和が訪れただろうか。われらのいまの暮らしぶりをみよ。この村でもあの村でも、かつての敵が同胞となっている。ウイスタン殿はこの光景を前にして黙しておられる。…我々は多くを殺した、それは認める。強き者弱き者の区別なく殺した。神も決して我々に微笑まなかったであろう。だが、この国から戦いが一掃されたのも事実だ。」

「悪事を忘れさせ、それを行なった者を罰せぬとは、どのような神なのでしょうか、騎士殿。」

「しかしはるか昔のことだ。骨は心地よい緑の絨毯に覆われて眠っている。若者は当時のことを何も知らぬ。このままこの地を去り、クエリグにあとしばらく義務を果たせてもらえぬか。あと季節がひとつかふたつ、せいぜいそのくらいであろう。それでも古傷が完全に癒え、我々に恒久平和が定着するには十分な時間かもしれぬ。」

「なにを愚かなことを、騎士殿。大量に蛆を湧かせる古傷が癒えるでしょうか。虐殺と魔術のうえに築かれた平和が長続きするでしょうか。誠実に願っておられることはわかります、…でも飛び散った塵は土の中で待機し、骨は掘り出されるのを待っているのです。」

ウイスタンが最初アクセルのことをよく思い出せなかったのは、アクセルを見たのは幼い時のことで記憶が不鮮明であった為と思われるが、ウイスタンとガウエインの記憶はアクセルたちよりも遥かに鮮明である。妙な呪文や不

思議な力を持つ生き物の影響をあまり受けることがないと、ウイスタンは自らの特質を語るのだが、作品に登場する比較的記憶がある人物を見れば、どうやら国中を歩き回り外部との接触が多いことが忘却の霧の影響を抑えるひとつの手段と推察される。老騎士ガウェインもアーサー王亡きあと放浪の旅を続けてきた。アクセルとベアトリスも旅で遭遇する人々とのかかわりのなかで、徐々に記憶を取り戻していくのだから。このことはイシグロが考える民族間の和解への手掛かりを示唆していると思われるが、あとで触れよう。ここでは異なる価値観のウイスタンとガウェインはそれぞれの世界の任務を忘れず、明確に意識していることは確かである。従ってどの程度記憶が戻っているのかということは、ウイスタンとガウェインにとってはほとんど意味のないことである。何故ならふたりが作品に存在する意義は、個人としてではなくて、異なる価値観、異なる民族・共同体のシンボルとしてなのだから。

ガウェインの側から任務を遂行する彼の信念を見てみよう。ウイスターの真の目的がクリエグを倒すことであると判明してからは理由をつけて幾度かウイスタンを追いつ返そうとする。しかしウイスターの決心が変わらないと悟り老騎士は覚悟を決める。異なる価値観、文化の衝突である。ガウェインはかつて勇猛で数々の勝利を収めた栄光のアーサー王の騎士であり、戦いの経験は豊富であるが今や老齢に達し、身を守る甲冑さえもその重さによるめくほどである。しかるにウイスタンは今まさに恐れを知らぬ壮年の勇猛果敢な戦士であり、サクソン人ながらもアーサー王の時代であったなら必ずアーサー王の目に留まり称賛されるほどの戦士であり、アーサー王の最強の騎士でさえ敵としてまみえることを恐れたであろうと、ガウェインがその力量を認めているほどである。客観的に推測すると勝敗の行方は明らかであるが、いまでも偉大なアーサー王の騎士であることに誇りを持っているガウェインは自らの信念、任務を放棄するつもりはない。与えられた責務を果たすためにはいかなる運命も受け入れるのが、アーサー王の騎士の理想の姿である。ガウェインは最後の最後まで、ウイスタンにクリエグ退治を諦めて帰国するよう求めるのだが、その意図は自らの命を惜しんだのではなくて、自らの理



念の正当性を信じたからである。何故ならガウエインには殺戮の循環は途切れることがなく、人間が自らの血肉のなかに抱く復讐への欲望は決して途絶えることがないということがわかっているからである。サクソン人との協定を破り村人を殺戮したのは、更に平和を長く維持させる方法が他になかった為に必要なものであったと考えているが、それでもサクソン人の少年たちはやがて戦士となり、倒れた父親の復讐に命を燃やし、憎しみの連鎖は途切れるどころか、鍛えられ強化されるということもガウエインにはわかっている。それはブリトン人の側でも同様である。かつてガウエインは一本の鋏を両腕で抱えたブリトン人の少女エドラに戦場の近くの道端で出会ったことがある。谷を下った戦場にいる、母と姉妹に残酷な行為をしたサクソン人の領主への復讐の手助けを求められたのだ。殺戮の現場にエドラを連れて行きたくはなかったが、彼女の決意を翻らせることができず、ついには戦いの真ただ中の戦場に連れて行く。地獄絵図のような血濡れの戦場のなか、エドラは悲惨で残酷な光景に顔を背けることなく、降り注ぐ矢のなかを目指す相手に向かって進んでいき、ついには憎むサクソン人の領主の前に対峙する。ガウエインに倒されたその領主は深手を負い地面に転がったまま立ち上がることもできず荒い息をしていたが、エドラはとどめを刺さず、痛みを与え苦しめ続けることで復讐を遂げようとするかのように、何度も何度も鋏を振り下ろし止めることはない。その時エドラの目にあった光は、悲惨な戦場で見るどんな光景よりもガウエインを凍らせるものであった。復讐への凄まじい執念はブリトン人であってもサクソン人であっても同様であり、殺戮の循環は止むことはない。アーサー王の命でマーリンが行った黒魔術は人々から記憶を奪った。大切で楽しい記憶も悲惨で残酷な記憶も共に忘却の彼方へと追いやられてしまったが、クリエグの息が続く限りは復讐の連鎖は止められるのだ。しかしこの魔術が永続するとガウエインが考えているのではない。クリエグの息が続き、人々が過去の殺戮を忘れていくうちにもしかしたら人間は恒久的な平和を築くことができるのではないかと、人間のこころのなかで復讐心の対極に存在している平和を求める心が勝るのではないかと、一縷の望みを託している。かくして悲惨な戦いが繰り返されることがないことを願い、

誇り高きアーサー王の騎士ガウェインはクリエグの護衛役としての任務を全うしようとしている。だがクリエグは老いて余命もあと幾何か、そして騎士ガウェインも既に老いてしまった。眠っていた復讐という名の巨人は今まさに眠りから覚めて動き出そうとしているのだ。

ブリトン人に対するウイスタンの復讐心はエドウィンとの関係でもまた明らかである。エドウィンとの出会いは通りがかったサクソン人の村で鬼に連れ去られたエドウィンを救助したことに始まる。助けられたエドウィンの体には噛まれたような傷跡があり、悪鬼 (fiend) に噛まれた者はいずれ悪鬼に変わると信じる村人から、救出された喜びではなくて命の危険を感じるほどの嫌悪感で迎えられる。長老アイバーからエドウィンの命を救う為、彼をどこかの村に連れて行くようにと依頼されたウイスタンは、アクセルにひとつの提案をする。サクソン人の村よりは、このような迷信のないブリトン人の村に連れて行く方が安全であるという理由から、ブリトン人であるアクセルにエドウィンを連れて行ってくれるように依頼する。そしてウイスタン自身も危険な山道の途中まで護衛役として同行するという提案である。エドウィンが同胞のサクソン人から命の危険を感じるほど阻害されるのは、悪鬼に噛まれた者はやがて悪鬼に変貌するというサクソンの迷信からである。この迷信が象徴するものは、エドウィンがやがて村人に災いをもたらず存在になるということであり、それはブリトン人に虐殺された過去の失われた記憶をサクソン人に取り戻させ、見せかけの平和は打ち砕かれて再び復讐と殺戮の連鎖が始まる恐怖を想起させる。犠牲となり破壊の嵐に巻き込まれるのはブリトン人だけでなくサクソン人もまた同様である。そしてエドウィンがブリトン人に対する復讐を象徴する存在となっていくことは物語の進行とともに明白になってくる。さらにウイスタンの提案にはもう一つの意図があることもわかってくる。ウイスタンは自らの任務を偽装しているが、アクセルの顔に幼い頃に尊敬していた人物で、その後の出来事で憎しみへと変わったブリトン人の面影を感じ取り、敵であるのかどうかを見極めるために同行を提案しているのだ。

エドウィンをブリトン人に託す意図が本当にウイスタンのなかにあったか

どうかは曖昧である。だが、エドウィンをブリトン人に対する復讐の戦士に育てたいという意味は確固たるものである。サクソンの村でただ一人戦場を経験している年寄りから、荒れ狂う戦いの嵐のなかでも沈着に動ける戦士の目をしており、遠からず誰もが恐れる男になると予言めいたものをされたエドウィンであるが、エドウィンが戦士の魂に劣らぬ狩人の才を持ち、類い稀な戦士の素質があると認めるウイスタンは、自分の国である東の沼沢地に連れ戻り、慈悲の心は微塵も見せない強靱な戦士として鍛えようと考え直す。そしてその手始めとして、本来なら少年の目には触れさせるべきでない、戦いと流血の残忍な場面のすべてを意図的に目撃させるのだ。エドウィンが復讐の連鎖の象徴となっていることは既に指摘したが、それを具現化したものが悪鬼に噛まれた痕と彼の心に聞こえてくる母の声である。傷跡の意味は前述したが、それにはもうひとつ重要な意味がある。それは噛まれたことによりエドウィンに何らかの変化、作用が起こり、まるでクリエグがエドウィンを引き付けるかようになっていくことである。エドウィンを道標としてウイスタンは目指すクリエグの元に近づいていくのだから、エドウィンは来るべき復讐の嵐への案内人としての役割を演じることになる。しかし聞こえてくる母の声はエドウィンに助けを求めているように感じられるので、彼の関心はクリエグよりも母の救出のほうにあり、この点に於いてウイスターの目的とは一致しないように見える。ところが実際に母の声がエドウィンを導いた所はクリエグの住処であり、ウイスタンがクリエグを倒した後には母の声は消えてしまう。このことから母の声が象徴するものは、クリエグの息で忘却の彼方に押しやられてもなお消え去らず存在する、エドウィンの血に流れる本能的な民族の復讐心の呼びかけとも考えられる。

### (3) 忘れられた巨人が動き出す

復讐の連鎖を断ち切るためという大義名分のもと、魔法をかけられたクリエグの息は人々の記憶に忘却の濃い霧をかけた。圧倒的な力で記憶を封印す

るのは理不尽な行為であるが、残虐な殺戮を繰り返す人間の性を目撃し、自らも殺戮を経験した者からすれば、それが残虐な行為の連鎖を止める唯一の手段であり、争いを止めることはまた贖罪の意味もあった。老騎士ガウエインはそれを体現する象徴たる人物である。かつてアクセルは異民族間に平和をもたらす協定を結ばせたが、さらなる恒久平和と安定をもたらすという大義により無抵抗の異民族が殺戮され、東の間の平和は無に帰してしまった。ウイスタンが子供の頃にアーサー王の騎士アクセルを見たということ、また、7年前にエドウィンの母が連れ去られたときには戦いが無い平和な時であったということから推察すれば、クリエグの霧で覆い隠されていた期間は10年からせいぜい20年くらいであろう。いまではクリエグも老いてその効力も弱くなり、隠されていた真実がやがて明らかになっていく流れは止めることができない。ガウエインとウイスターの対立する価値観は、簡潔に言えば、悲惨な過去はできるなら忘れてしまうことが幸せに繋がるのか、あるいは真実に顔を背けることが真に生きる道なのか、という問題であろう。言い換えれば、傷の痛みを感じないまま時が自然に傷を治癒させるのに任せるのか、あるいは傷の痛みを認識することから今後の治療方法を主体的に考えるのかということであろう。もっと単純に考えれば真実に向き合うのか、そうでないのかということだが、このように二者択一の選択を迫られたらその答えは明確であろう。賢僧ジョナスの言葉を借りればこういうことである。

That no forgiveness awaits us at the end of this path. That we must uncover what's been hidden and face the past. (p.166)

今の道の先に許しなどない。隠されていたことを公にして過去と向き合おう。

しかし真実に向き合うことはまた同時に封印しておいた悲惨な思い出も解き放つことでもあり、それは激しい痛みと悔恨の念を伴っている。アクセルとベアトリスが忘却という扉を開けると、そこから解き放たれたのは不実と悲しい事実、そして小さな復讐心であった。しかしそれでも二人で歩んできた年月の積み重ねはゆっくりしか治らないが結局は治癒する傷のように、緩や

かではあるが相互への愛を深めたと思われ、黒い影も愛情全体の一部であると認識するに至っている。アクセルが語るように、忘れていた間に傷を癒す時間が得られたことで、夫婦の強い絆を結ぶことができたのだ。このように考えると、個人のあいだの問題は個人の内にのみ存在するものだから、和解と融合にはある程度の忘却の期間は有効に作用すると考えられる。そこで問題となるのは忘却と覚醒のバランスであろう。

我々が何かを記憶しているというとき、その記憶の内容は全て過去のことである。過去までの時間の長さや、精神活動のひとつとして意識下で好ましいものかそうでないかを選別することにより、記憶は曖昧になるもの、微かに覚えているもの、忘却の彼方に押しやられるもの、逆に増幅されて誇張されるものに分かれていく。しかし我々が何か過去のことを思い出した時、覚醒する内容、事象、場面などは、全て我々の前には「いま」在るものとして蘇るのであって、決してそれは過去のものではない。復讐の念が蘇るとき、それは過去の怨念ではなく、今この時に燃え盛る復讐の炎となる。過去の怨念はいまこの時の復讐として蘇るのだから未来へ向けてそれを抱えたまま向かっていくことになる。アクセルとベアトリスのように個人の間での傷跡は時間の流れが治癒させることも可能であった。しかしさらに大きな集合体である民族全体にとって、呼び起こされた復讐という巨人をいかにして止めるのか、民族紛争の過去の忌まわしい記憶とどのように向き合うべきかという課題は、イングロがいくつかのインタビューで語っているように<sup>9</sup>、過去だけのものではなくて極めて現代的な問題でもある。それはアクセルとベアトリスの個人間の問題とは異なり、民族の記憶をどのようにして共有し、引き継いでいくかという問題となる。

クリエグが倒れ人々の心で眠っていた復讐という炎が再び燃え始めた時、それは新たな殺戮の始まりの時である。ガウエインとクリエグを共に倒して巢穴から出てきたウイスタンは意気揚々としておらず、何故か勝利で浮き立った様子はなく、むしろ意気消沈しているように見える。その訳をウイスターの言葉にみてみよう。

And now I sit here, shaking not from weariness, but at the very thought of what my own hands have done. I must soon steel my heart or be a frail warrior for my king in what's to come.... It's justice and vengeance await,...And they'll soon hurry this way, for both are much delayed.... My king sent me to destroy this she-dragon not simply to build a monument to kin slain long ago. You begin to see, sir, this dragon died to make ready the way for the coming conquest.... The giant, once well buried, now stirs. (pp.322-324)

いまこうして震えながら座っているのは疲れたからではなく、この手で何をしたかを考えるからです。私は心を鋼鉄に鍛え上げねば、来るべき世で王のために役に立たない戦士になってしまいます。…待ち受けているのは正義と復讐です。…これまで正義と復讐は遅れていましたが、いまや大急ぎでこちらにやって来ます。…私の王が雌竜退治を命じられたのは、遠い昔に虐殺された同胞への記念碑を立てるためだけではありません。もうお判りでしょう、この竜退治は来るべき征服に道を開くためなのです。…かつて地中に埋められて忘れられていた巨人が動き出すのです。

ウイスタンは戦士として王に与えられた任務を遂に果たした。しかしクリエグを倒し、人々に記憶が呼び覚まされたとき何が起きるのかわかっているのだ。自分の手で成し遂げた行為が始めることになる恐ろしい未来のことが。それは復讐という正義の名を掲げて行われる新たな殺戮と戦いである。征服という暗い欲望を持つ、人間のこころの底に埋められていた巨人が解き放たれたのだ。我々はやがてサクソン人がブリトン人を駆逐する歴史的事実を知っている。しかし殺戮の連鎖は留まることはなく、イギリスではその後デーン人、ノルマンディー公ウイリアム、ナポレオン、ヒトラーという征服者たちとの戦いが続き、あるものは征服を成し遂げ、あるものは敗れ去った。現代に目を転じると、新たな戦いを止めるべく、民族の融合を目指したEUであったが、イギリスはこの作品の発表の翌2016年の国民投票で離脱を決定し、EUはまるでクリエグの霧と歩調を合わせるかのように発足後僅か20数年で初の加盟国離脱という局面を迎え、今後の行方は不安定である。動

き出した巨人の強大な力を前にして、微力な我々がその行方を遮るために採るべき道にはいかなるものがあるだろうか。クリエグを倒して任務を果たし終えたウイスタンとアクセルの会話に戻ってみよう。

‘I’m comforted at least, sir, to find you take no delight in these horrors you paint.’

‘I’d take delight if I could, Master Axl, for it’ll be vengeance justly served. Yet I’m Enfeebled by my years among you, and try as I will, a part of me turns from the flames of hatred.’ (p.324)

「恐怖の絵を描きながら、少なくともあなたがそれに喜びを感じていないのが救いです」

「できるものなら喜びたいです、アクセル殿、正当な復讐ですから。しかしあなたがたと長く暮らしすぎて私は弱くなりました。どのようにしても、憎しみの炎から目をそらしてしまいます」

ウイスタンは自らの正義を果たしたが、それでも喜びを感じないのは、敵であるはずのブリトン人のなかで暮らし過ぎたことにより「弱く」なったからだと認める。実はウイスタンは小さい頃にブリトンの兵士に連れていかれ、ブリトン人の戦士になるための訓練を受けたという過去がある。訓練を共に受けたブリトン人の仲間たちとは兄弟同然に暮らし、本当の兄弟のように愛し始めていたが、ただひとり、領主の息子のブレヌスは例外だった。ウイスタンによれば、ブレヌスが貴重な教訓を与えてくれたおかげで、ブリトン人を兄弟のように愛することがいかに恥ずべきことかと考えるようになったというが、幼い頃にブリトン人の仲間たちに抱いた感情がこころの奥に実在していることは否定できない。更にもうひとつ、アクセルが結末で、結果的に過去の虐殺を引き起こす誘因となったアーサー王の騎士であることを認め、憎むべき敵としてウイスタンに復讐の意思があるのか問う場面を見てみよう。



‘Master Axl,’ the warrior said, ‘Could you be that gentle Briton from my boyhood who once moved like a wise prince through our village, making men dream of ways to keep innocents beyond the reach of war?’

‘This man you remember, Master Wistan. Is he one of whom you would seek vengeance? Your swords still drips. If it’s vengeance you crave, it’s a thing easily found...’

‘That man was one I once adored from afar, and it’s true there were times later I wished him cruelly punished for his part in the betrayal. Yet I see today he may have acted with no cunning, wishing well for his own kin and ours alike. If I met him again, sir, I’d bid him go in peace...’ (p.319-320)

「アクセル殿」と戦士が言った。「私が少年の頃、村を賢い王子様のように闊歩し、罪のない人を戦いから遠ざけてくれるという夢を見させてくれたやさしいブリトン人がいました」

「ウイスタン殿、覚えているというその男、その男はあなたが復讐したい男の一人なのですか。あなたの剣はまだ濡れています。復讐をお望みなら簡単でしょう…」

「その男は私の憧れでした。のちに、裏切りに加担した罪できつく罰せられるよう何度も望んだことは確かです。でもいまはわかります。騙すつもりではなく、ブリトン人にもサクソン人にも良かれと思ってやったことかもしれないと思います。もしまた会うことがあれば、平和のうちに進むようにと言うでしょう…」

アクセルが憎むべきブリトン人のアーサー王の騎士であったことを認め、思いのままに復讐を遂げるようにとアクセルが自らの命を差し出したとき、ウイスタンにはその意思はない。ウイスタンは復讐に踏み込めないのは自分の恥ずべき「弱さ」であると認めており、それは敵であるはずのブリトン人たちと長く暮らし過ぎたことが原因であるということは既に指摘した。しかしその弱さは恥ずべきものではなく、その「弱さ」が示唆するもののなかに、巨人を止める策の手掛かりをイシグロは込めている。「弱さ」とは敵を

憎み切れない心でありそれは和解への入り口となる。ウイスタンはエドウィンとともにサクソン人の復讐の象徴となる人物だが、ウイスタン自身はこれまで指摘してきたように、ブリトン人のなかで戦士として鍛えられており、ガウェインが見抜くように、ウイスターの戦いぶりはまさにブリトン人のものである。ウイスターの存在自体がブリトン人でもあり、また、サクソン人でもあるという曖昧なものなのだ。エドウィンは自らの弱さを恥じるウイスタンが、甘い感傷に侵されない、鋼鉄の心を持つ慈悲のこころなど微塵も見せない戦士に鍛え上げたいと願い、復讐の象徴となる少年だが、クリエグを倒したあとのエドウィンの言葉のなかにも微かな希望の光は窺える。

There was no sign of Wistan. It was just the old couple here, but Edwin felt comforted by their presence. They were standing before him, gazing at him with concern, and the sight of the kindly Mistress Beatrice made him feel suddenly close to tears... a promise made to the warrior; a duty to hate all Britons. But surely Wistan had not meant to include this gentle couple.

ウイスターの気配がなかった。ここには老夫婦しかいない。だがいてくれることでエドウィンのこころが安らいだ。ふたりは前に立って、心配そうに見ている。親切そうなベアトリスさんの姿をみると、突然涙が出そうになった…戦士との約束があった。すべてのブリトン人を憎む義務がある。でも、このやさしいご夫妻も含めるとは、ウイスタンさんも思っていないだろう」

サクソン人の復讐の怨念を引き継いで、やがて完璧な復讐の戦士となるだろうエドウィンのこころにも、全てのブリトン人を憎めないところがある。イシグロの考えでは、我々が和解と融合を求める拠り所となるのは、ウイスターの「弱さ」であり、エドウィンにある敵を憎み切れない心の在りようなのであろう。「忘れられた巨人」が意味するものはただ復讐心だけではない。個人や民族全体の心のなかで抑制され忘れられたかのように眠ってはいるけれど、確かに存在している憎しみ、差別、嫉妬などもそうであり、巨人

は民族、国家によりその姿を様々に変えていく。従って融和と理解、平和への道のりは決して容易なものではなく、我々にはこれから先も険しい道が続いている。イギリスは大英帝国として多くの植民地支配をした頃から、必然的に多くの民族問題、民族間の和解という問題に直面しており、他の小説でもこのテーマは度々取り上げられてきた。フォスターの『インドへの道』の結末の場面でイギリス人フィールディングとインド人医師アジスは、「僕は友達になりたいのだ。君だってなりたがっているんだ」と民族を超えて友情を育みたいと願う。しかし彼らの乗る馬も、大地も空もそれを望んでおらず、「だめだ、まだだめだ」<sup>10</sup>という声を感じるところで作品が終わっている。イシグロの最新作の90年ばかり前に発表されたフォスターのこの作品では、人間関係を構築するために国家や政治には期待をしておらず、個人個人の、人を超えるものに対する感覚に訴えかけるもの認識すること、それが相互理解の方法であることが暗示されているが<sup>11</sup>、イシグロがウィスタンとエドウィンの心の奥にある民族固有のイデオロギーを超えた感覚<sup>12</sup>に和解の道の可能性を託しているのと同類のものである。しかしフォスターの作品のあとには悲惨な大戦争を経験し、今に至るまで我々はいまだ最終的な有効手段を見いだせていない。

個人の間での軋轢や民族間の価値観の相違はおそらく人間が存在し始めたころから既に存在し、それが引き起こす不和や憎しみがやがて大きなうねりとなり、争いや戦いという殺戮に導かれていった。それは現在に至るまで人間が未だ解決できていない問題であり、今後もおそらくは続いていくものであろう。アクセルとベアトリスの問題は同じブリトン人であり、夫婦という共通の基盤があることで、アクセルが認めるように、時の流れが緩やかに傷を癒していくという解決法もあろう。しかし民族という大きな共同体が、異なる歴史文化と価値観を持つ別の共同体と衝突する時、お互いの理解と融和の道は更に険しいものとなる。作品の外観は前述した通り、歴史的事実が曖昧な時代が背景となり伝説のアーサー王や騎士たちが登場し、物語構成はゲルマン伝承文学である『ベオウルフ』の竜退治をモチーフとして描かれてい

る。イシグロはこの作品でこれまで常に関心をもって取り上げてきた記憶というテーマを用いながらも、新たな民族同士の融和というより大きな問題に転換している<sup>13</sup>。復讐の連鎖を食い止める術は果たしてあるのだろうか。ガウェインは平和の構築に望みを託し、もしかしたらほんの少し先にあるかもしれない和解を待つために、それまでの時間稼ぎとしてクリエグの霧で忘れさせることを手段とした。我らの民族を考えてみよう。戦争の始まりの事情はどうであれ、結末は核爆弾を被弾した人類初の民となり、一瞬にして何十万の民間人の命が奪われ敗戦した。然るに今に至るまで戦後70年数年、爆弾投下国に対して復讐を試みるものはいないだろう。むしろ彼の国の文化、経済力に無条件に憧れを抱き続けてきた。まるでクリエグの霧で過去を忘れた民のように。その霧の実態は彼の国の膨大な消費文化を支える豊かな経済力への憧れ、そしてその追従により生じる満足感という名の霧である。人間は欲望が満たされないときに不安、不満、怒り、嫉妬などの負の感情を露にし、それが争いの契機となっていく。霧を消さないためには常に消費文化を追い求めなくてはならず、その欲求は留まることがないように思えてくる。しかしクリエグの霧が消え経済的な豊かさが消滅したとき、我々はどうの道を進むのか。この意味においてガウェインの価値観は間違っていないように思える。しかし、分断やアイデンティティーの危機を前にして沈黙するのではなく、私たち誰もが個人を超えて世界に関わることがとても重要であるとイシグロはインタビューで語っているように<sup>13</sup>、結末でイシグロが示す道はガウェインとは異なっているように思える。

作品の最後はいわゆる「開かれた結末」で曖昧なところがあり、いくつかの解釈があるだろう。ベアトリスが死んだ息子が待つ島に向かい、ひとりではか行けない船に乗るという結末が示唆するところは想像するのは難しくはない。むしろアクセルの行動のほうが理解するのが困難である。結末は以下の文章で終わっている。

He wades on past me, not glancing back. Wait for me on the shore, friend, I say quietly, but he does not hear and he wades on. (p.345)

やつ（アクセル）は俺の横を通り過ぎ、振り向きもしない。岸辺で俺を待っていてくれ、友よ、と、俺はそつと言う。だが、やつは聞いておらず、先へ進んでいく。

あれほど夫婦ふたりで一緒に島に行きたいと願っていたのに、アクセルはひとことベアトリスに別れの言葉を告げただけで、自分を運ぶ船が戻るのを待つ素振りさえ見せず先へと歩いていくところで物語は終わっている。船頭のいる入江に近づいたときは、アクセルは疲れ果てており、馬からベアトリスを降ろすことさえ危なっかしいほどの弱々しさであった。ところが結末に近づくにつれ、船頭の観察によれば、何故かアクセルの体の内にはまだ小さな火が燃えており、その目にはまだ炎が残っているように感じられるし、実際アクセル自身も、力が戻った感じがすると認めている。忘却とは精神活動が一時停止することでもあるから、忘れることは事象が自分から離れて遠い過去へと去っていくということではない。我々が存在する限りは我々と共にここにある。従って、記憶が戻り、封印していた過去が蘇った今、それらはもはや遠い昔に置いてきた過去の遺物ではなくて、アクセルのなかに「いま、ここに」在るものなのだ。ベアトリスの夫として、また騎士としての悔恨、苦悩、悲しみ、責務、そうしたものすべてを背負って、アクセルはいま進んで行くのだ。夫婦の間での和解は既に成って、平穏の地に旅立つベアトリスには別れの挨拶をした。残るのはアーサー王の騎士として成し遂げることができなかった民族間の和解の任務である。民族間、共同体間の軋轢、争いは古くて新しい、そしてこれからも続いていけりう危機であるが、イシグロが語るように<sup>14</sup>、我々にはその壁を越えて行く必要があるのだ。

いまやクリエグは倒され、マーリンの魔術は消え、眠っていた復讐の炎が燃え始めた。再び始まる殺戮の連鎖を断ち切ろうとするかのように、倒れ去った騎士ガウエインに代わりアクセル、いや騎士アクセラムはやり残した困難な任務へと決然と進んで行くのである。

## Notes:

1. Ishiguro, Kazuo. *The Buried Giant* (Faber & Faber, London, 2015), p.280. なお本文中の英文引用はこの版によるものである。
2. 本文中の和訳は『忘れられた巨人』土屋正雄訳を参考にさせて頂いた。
3. It sounds very admirable that somebody should be so dedicated that they spend 10 years- I have never spent 10 years writing a novel. It is because I do other things, and probably the longest between books is 5 years for me. It is not loneliness that is the problem. These days writers are required to become very public figures, and so part of the reason I have such long gaps between my books is that often I publish a book and then I spend about 2 years going around the world talking about it, taking part in conferences or getting involved with movie adaptations. Some of which really get made, many that don't. I spent a lot of my time like a kind of businessman, going into meeting about casting or film funding, or theatre adaptations.
4. パドニクス山の戦いから比較的近い6世紀に書かれたギルダスの『ブリタニアの略奪と征服』(*De Excidio et Conquestu Britanniae*)には戦いの記述はあるものの、アーサーについては何も書かれていないし、『アングロサクソン年代記』(*Anglo-saxon Chronicle*)にもアーサーの記述はない。ポスト・ローマのブリタニアの重要な資料である8世紀のベーダーによる『英国民教会史』(*Historia ecclesiastica gentis Anglorum*)にもパドニクス山の記載はあるが、アーサーの名前は見られない。ただし『ブリトン人の歴史』『カンブリア年代記』の記述を根拠にして、アーサーは実在の人物で5世紀後半から6世紀初めにアングロ・サクソンと戦ったローマン・ケルトの指導者であったという説がある。
5. 『ブリトン人の歴史』はウェールズの修道士ネニウスの作とされる9世紀のラテン語の歴史書であり、いくつか写本が残されている。これにはアーサー王が12回にわたるサクソン人との戦いを行い、最後にパドニクス山の戦いで、一日に960人の敵を倒し大勝利に終わったことが書かれている。しかし最近の研究によればこの歴史書の信ぴょう性に疑問が投げかけられている。
6. 『カンブリア年代記』は10世紀のものアーサー王をパドニクス山の戦いと関りある人物として描いている。この戦いが行われたのは518年のことで、539年のカムランの戦いでアーサーが討ち死にしたとされる。
7. イシグロは記憶していることと忘れることについてのテーマに関心を持つようになったことについて、インタビューで語っている。

As I've got older, I think I've wanted to apply that same question about people

remembering their pasts, and wondering, 'is it best just to forget the past? Or do I have to confront it?' I've applied that question to countries-how does a nation decide what is best to forget about the dark past? Sometimes, a country has to forget in order to move forward, in order to stay together, in order to stop the community fracturing into civil war, or into factions. And we can see, all over the world, situations where countries are in constant civil war, or in cycles of violence, because they can't forget what happened. So, sometimes, forgetting is necessary, but, on the other hand, can you really build a stable, democratic society, when you haven't addressed great horrors and injustices that have occurred. So I think this one of the ...it seems to me countries have the same question that individuals do, who have come through difficult periods. You know, when is it better to forget? And when do you have to remember? So, these themes have really preoccupied me from the start till the present. (NHK WORLD-JAPAN NEWS, December 9, 2017.)

更に記憶というテーマに関してインタビューで以下のように語っている。

I was using memory as a technical device. Around the time of when I was writing *The Remains of the Day* and *The Unconsoled* [1995], I was fascinated intrinsically by memory. I just wanted to enter a world of memory. It gave me a thrill, to be in this kind of mode when a narrator would say he or she couldn't quite remember. When I was younger it was easier to point to the terrain of memory. There was less of it, there were fewer places that qualify as memory. But as you get older, the whole thing becomes more complex and you start to do strange sums sometimes. You surprise yourself when you learn that the distance between when you were at university and when you were five is less than fifteen years.(Gross, Sebastian, *the new seriousness: Kazuo Ishiguro in conversation with Sebastian Groes, Kazuo Ishiguro new critical visions of the novels*, Red Globe Press, 2011, p.258.)

8. 『忘れられた巨人』においてわたしが書きたかったテーマは、ある共同体、もしくは国家は、いかにして『何を忘れ、何を記憶するのか』を決定するのか、というものでした。わたしは、これまで個人の記憶というテーマを扱ってきましたが、本作では『共同体の記憶』を扱おうと思ったのです。そしてそこから前作と同じように、空間と場所の設定を考えましたのです。GEEK'S GUIDE TO THE GALAXY & WIRED
9. 『忘れられた巨人』は、「社会における記憶」を扱った作品です。人間はいかにして憎しみを作り上げるのかについて書きました。この社会では時として、過去をあえて掘り起こして、今では存在しないはずの憎しみを過去の記憶から新たに作ったり、世代



から世代へと伝えていくことがあります。歴史をコントロールすることによって、憎しみが再創出されることがあるのか、という問題を描きました。

「綾瀬はるか×カズオ・イシグロ」『文藝春秋』2（2016）

- 10.小野寺健訳『インドへの道』E.M.フォスター著作集4（みすず書房、1995年445-446頁）
- 11.浅田雅明『Vision or Nightmare』福岡女学院大学短期大学部紀要 第41号、2005年3月
- 12.Ishiguro asserts that his writing reaches out to 'express meaning that can't usually be expressed through normal language. Sim, Wai-chew, *Kazuo Ishiguro* (London & New York: Routledge, 2010), p.107.
- 13.イギリスのEU離脱に関連してイシグロは、過去数年間で西洋社会の多くが深刻な分断やアイデンティティーの危機に陥っていると指摘し、沈黙するのではなく、私たち誰もが個人を超えて世界に関わることがとても重要だと語っている。日本経済新聞 2017年12月6日
- 14.イシグロはノーベル賞受賞時のスピーチで、共同体が分裂して敵対するこの時代に、その壁を越えて行くよう戦う必要があると述べている。  
We live today in a time of growing tribal enmities, of communities fracturing into bitterly opposed groups. Like literature, my own field, the Nobel Prize is an idea that, in times like these, helps us to think beyond our dividing walls, that reminds us of what we must struggle for together as human beings.  
(Kazuo Ishiguro's speech at the Nobel Banquet, 10 December 2017)

## 参考文献

- Alter, Alexandra. "For Kazuo Ishiguro, 'The Buried Giant' Is a Departure, The New York Times, February 19, 2015.
- Arendt, Hannah. *The Origins of Totalitarianism*, Chicago: University of Chicago Press, 1998.
- Beedham, Matthew. *The Novels of Kazuo Ishiguro*, Palgrave Macmillan, 2010.
- Mason, Gregory. 'An Interview with Kazuo Ishiguro', *Contemporary Literature*, 1989.
- Shaffer, Brian W. *Understanding Kazuo Ishiguro*, Columbia S.C. 1998.
- Bradbury, Malcolm. *The Modern British Novel*, Penguin Books, 1993.
- Allan Vorda and Kim Herzinger. 'An Interview with Kazuo Ishiguro', 1990.
- 『カズオ・イシグロの世界』ユリイカ 12月号（青土社）2017

